

3

バレちゃった……!?

(ええっと、このお店はどこにあるんだっけ。)

立ちどまって、スマホをチェックする。

今日のわたしは、大きなリボンつきブラウスと、ネイビーのミニスカを合わせた大人めコーデ。

ソール高めめのローファーと、エナメルのリボンショルダーをカカオブラウンでそろえたのがポイント。

髪は、ミルクティーベージュのロングヘア。

もちろん、おねえちゃんのウィッグだ。

休日の今日、ほしかったコスメと服や小物をゲットしてきたところ。

といっても、どれもおこづかいで買えるプチプラのものばかりなんだけど。

せっかく街^{まち}まで出てきたんだから、なにか甘い^{あま}ものでも食べて帰^{かえ}ろうと地図^{ちず}アプリで確^{かく}
認^{にん}したら、この近^{ちか}くにチーズケーキ専門^{せんもんてん}店^{みせ}がある^{ひようじ}って表示^{ひようじ}された。

一番^{いちばん}人気のコーヒーチーズケーキは、一日^{いちにち}限定^{げんてい}十個^{じこ}なんだって。

なにそれ。

絶対^{ぜったい}食^たべたいやつ。

早^{はや}く行^いかなきゃ、なくなっちゃう！

スマホをしまつて、歩^{ある}きだす。

ひとりでカフェに入^{はい}れないって子^こもいるらしいけど、わたしは平気^{へいき}！

むしろひとりのほうが気^き兼ねなく写真^{しやしん}を撮^とれるし、時間^{じかん}を気^きにせず^きまつたりできる。

（このあたりのはずなんだけどな。）

もう一度^{いちど}地図^{ちず}を見^みたら、お店^{みせ}は公園^{こうえん}の向^むこう側^{がわ}にあるみたい。

公園^{こうえん}をつつきつたほうが近道^{ちかみち}だ。

あとちょっとというところで、すごい人^{ひと}だかりが見^みえた。

（もしかして、並^{なら}ばなきゃ入^{はい}れないくらい人気^{にんき}なのかな。限定^{げんてい}のコーヒーチーズケーキ、

なくなつてたらどうしよう。)

心配しながら、近くまで行つたところで、ハッと息をすった。

人だかりのまんなかにいるのは、同じクラスの水無瀬くん!?

「LEO!」

「やっぱ、カッコいい!」

女の子たちは、きやあきやあ言いながら、水無瀬くんを取りかこんでいる。

「プライベートだから、写真は撮らないで。」

めがねをかけた水無瀬くんが、両手で顔をかくして頼んでるのに、女の子たちはかまわ

ずスマホを向けている。

きつと、水無瀬くんが普通に歩いていたら、ファンの子たちに見つかつて、取り囲まれ

てしまったんだろう。

めがねで変装したつもりなのかもしれないけど、そんなので、あの芸能人オーラを消せ

るわけないのに。

気がつくつと、騒ぎに気づいた人たちがどんどん集まつてきて、さつきよりもずっと人が

増^ふえている。

その中心^{ちゅうしん}にいる水無瀬^{みなせ}くんは、本気^{ほんき}で困^{こま}っているみたいだ。

（助^{たす}けてあげようかな……。けど、早^{はや}く行^いかなきゃ限定^{げんてい}のコーヒーチーズケーキがなく
なっちゃうし。）

そこで、ふと思^{おも}いだす。

水無瀬^{みなせ}くん、前^{まえ}に、わたしの消^けしゴムをわざわざ拾^{ひろ}ってくれたよね……。

なのに、困^{こま}ってる水無瀬^{みなせ}くんを無視^{むし}してチーズケーキを優先^{ゆうぜん}させるって、人^{ひと}としてどう
だろう？

それに、助^{たす}けたところで、わたしがクラスメイトだなんて気^きがつかないよね。

席^{せき}が近^{ちか}い小池^{こいけ}さんですら、わたしがとなりに座^{すわ}っていてもまったく気^きづかなかつたら
いだし。

そもそも、水無瀬^{みなせ}くんは、ほとん^{がっこう}ど学校^きに来てないんだから、存在^{そんざい}感^{かん}ゼロのわたしのこ
となんて覚^{おぼ}えていないはず。

（だったら、ここは助^{たす}けてあげなきゃ！）

わたしは、公園こうえんの木のかげにかくれてから、すつと息いきを吸すいこんだ。

「見て！ あつちで甲斐かい亜嵐あらんの撮影さつえいしてる！」
大声おほこえで叫さけんだら、

「え、うそ。」

「LEOレオだけじゃなくて、亜嵐あらんもいるの？」

水無瀬みなせくんを囲かこんでた子こたちの視線しせんが外はずれる。

（今いまだ！）

わたしは、今日きょう買かったばかりのキャップをふかくかぶり、すばやく水無瀬みなせくんのそばに
かけつけた。

「こっち来て！」

小声こごえで耳元みみもとにささやき、腕うでを引ひく。

いきなりそんなこと言いって、あやしまれるかと思おもったけど、水無瀬みなせくんは意外いがいなほど素す
直なおにわたしのあとをついてきた。

「あ！ LEOレオが逃にげちゃう！」

誰かの声を背中^{せなか}で聞きながら、走^{はし}つてそばにあったコンビニの裏^{うら}に回^{まわ}る。

そこから、細い路地^{ほそろじ}を右に左にいくつも曲^まがり、ようやく誰^{だれ}もない遊歩道^{ゆうほどう}に出^でた。

「ここまで来たら、大丈夫かな。」

はずむ息を整^{いぎととの}えて、つぶやくと、

「なんで助^{たす}けてくれたの？」

水無瀬^{みなせ}くんが、ずれためがねのまま、とまどった表情^{ひょうじょう}でたずねる。

「その前^{まえ}に、ちよつとごめん。」

そう断^{ことわ}りを入れてから、持^もつていたバッグを開^あけた。

今^{いま}、手元^{てもと}には、ちよつど買^かったばかりのコスメがある。

これを使^{つか}えば、今^{いま}よりちよつとはマシに変装^{へんそう}させてあげられるはず！

「LEO^{レオ}だつてこと、みんなにバレちゃ困^{こま}るよね。だつたら、わたしにまかせて。」

そう言^いいながら、取^とりだしたヘアクリームを両手^{りょうて}につけ、水無瀬^{みなせ}くんの髪^{かみ}にもみこんで

いく。

「これも、取^とるね。」

めがねを外して、アイブローペンシルでまゆをかき、パウダーをまぶたにのせた。

コームで髪をなでつけて、シャツのすそを思いっきりボトムに押しこむ。

ついでに、ボタンも首元までしっかりとめ、最後にめがねを戻したら……。

「はい、できあがり。」

わたしの言葉に、されるがままだった水無瀬くんがハッと意識を取り戻して、自分の姿を見た。

「うわっ、なにこれ。」

水無瀬くんは、そばに停まっていた黒いワンボックスカーの車体にうつる自分の姿を見てぼうぜんとした。

そりやあそうだ。

カッコいいLEOとはぜんぜんちがう、ザ・まじめな中学生ファッションに変身してるんだから！

「見る？」

わたしが手鏡を渡すと、水無瀬くんは自分の顔をさわりながらつぶやいた。

「すごつ、俺の顔が別人みたいになつて……!」

「まゆの形を変えて、まぶたをメイクでわざとはれぼったくさせたの。あとシェーディングで顔のりんかくも変えてみたし。」

「ええつ、あの短時間で?」

おどろく水無瀬くんは、

「こんなの、簡単だよ。家に帰ってしっかり洗ったら元に戻るから。そのメイクのままいれば、バレずに家まで帰れるよ。」

そう説明していたら、わたしたちと同じ年くらいの女の子たちの集団が、こっちに向かつて歩いてくるのが見えた。

水無瀬くんの表情がかたまる。

「亜嵐なんて、いなかったじゃんね。」

「つていうか、LEO、いつたいどこ行っちゃったんだろ。一瞬で消えちゃって、びつくりしたよ。」

「ホント! せっかく会えたと思つたのに。」



女の子たちは文句を言いながら、わたしたちの前を通りすぎていった。

「ヤバ。本当に気づかれてない……。」

水無瀬くんがおどろいたように、もう一度鏡の中の自分を見る。

「でしょ？ わたしの変身メイクのおかげだよ？」

わたしは腰に手をあて、えへんと胸をはった。

「あなた、芸能人なんでしょ？ 人がおおぜいいるところに行くなら、今度からはしつ

り変装したほうがいいと思うよ。そんなめがねだけじゃ、意味ないし。」

わたしが言うと、水無瀬くんは、ムツとした顔で口をとがらせた。

「なんで出かけるだけで、変装しなきゃいけないんだよ。俺はただ、このあたりにおい

いコーヒーチーズケーキがあるって聞いたから、探しに來ただけなのに。」

その言葉に、ハツとする。

（そうだ。コーヒーチーズケーキ、忘れてた！）

「ごめん、返して。」

わたしはひったくるように水無瀬くんの手から鏡をうばうと、

「じゃ、わたしはここで！」

くるつと向きを変え、早足で歩きだした。
すると。

「ちよつと待つて。」

うしろから水無瀬くんがわたしを引き留めた。

（もしかして、わたしのこと、おしやれなイケてる女の子だと思ってる!?）
変身しているとき、こういうことがよくある。

「モデルになりませんか？」とか、「お茶でも飲みませんか？」とか。

だけど、ごめん。

今は、めちやくちや盛ってるけど、本当のわたしは、存在感ゼロで誰にも気づいてもらえない地味女子。

お茶なんてのんびり飲んでたら、さすがに正体がバレてしまうかも。

「ごめんね、ちよつといそいでるんだ。」

いつものようにモテ女子になりきって、手をひらひらと振り、そのまま、歩きだそうと

したら。

「きみ、佐藤さんだよな？ 同じクラスの。」

その言葉に、サーッと顔から血の気が引く。

（……へっ？　なんで？　わたしってバレてる!?）

「ちっ、ちちちちち、ちがいますけど。」

思わず声が裏返る。

あせっていることに気づかれないう、背中を向けてそのまま行こうとしたけれど、足音が近づいてきて、ポンと肩をたたかれた。

おそろおそろ振りかえると、水無瀬くんがにつこりほほえむ。

「ちがわないでしょ？　シャルマン学園中等部一年二組出席番号十一番の佐藤杏さん。」
よどみない水無瀬くんの声に、がつくり肩を落とす。

（……うそ。なんでバレちゃったの!?)